

銭謙益と杜詩詳註

清代禁書とその疎漏

佐藤浩一

1 問題の所在

- ・清代の禁書処分……熾烈をきわめた。(参照：岡本さえ『清代禁書の研究』東大出版会)
- ・『杜詩詳註』……乾隆34年以後刊行の『杜詩詳註』は「銭謙益」が削除。
ところが、そこかしこに「銭謙益」の名が残っている。この意味を考察する。

2 『杜詩詳註』の版本

・3種類の『杜詩詳註』¹

- ① 抄本 1693 (康熙32)年 (上海図書館蔵。孤本)
- ② 刻本 1703 (康熙42)年初刻本
- ③ 排印本 1979年 中華書局

刻本の流れ

康熙42年初刻本→1713 (康熙52)年補刻本 (仇兆鰲76歳)

→ 1717 (康熙56)年に仇兆鰲逝去。

よって1717年以降の『杜詩詳註』は全て後印本。

3 根拠としての銭謙益

・周采泉『杜集書録』(上海古籍出版社1986年):「芸生堂的《杜詩詳注》是清康熙52年(1713)刻的。」

☞これは誤り。芸生堂本は乾隆34年(1769)もしくは41年(1776)以後の翻刻本。

根拠は、銭謙益。

¹ 佐藤浩一「『杜詩詳註』伝本研究——抄本・刻本・排印本」(『唐代文学研究』11輯, 2006年)。劉重喜「『杜詩詳註』版本考辨」(『中国詩学』10輯, 2005年)。『柏克莱加州大学東亜図書館中文古籍善本書志』「杜詩詳註」262頁(上海古籍出版社, 2005年)。潘建国「『杜詩詳註』初刻補刻異同考」(『版本目录研究』2012年第3期)等。

・ 錢謙益を禁書処分

乾隆34年6月諭：「錢謙益本一有才無行之人，在前明時身既躋士，及本朝定鼎之初，率先投順，游涉列卿，大節有虧，實不齒於人類。……其所著『初學集』『有學集』，荒誕悖謬，其中抵毀本朝之處，不一而足。」

乾隆41年11月諭：「其人實不足齒，其書豈可復存，自應仔細查明，概行毀棄」。

- ☞ 乾隆帝みずから錢謙益を『弑臣伝』乙編に入れて、その著作を禁書処分とした。芸生堂『杜詩詳註』は、「錢謙益」の名が削られており、よって乾隆34、41年以降の版本だとわかる。康熙52年（1713）刻本ではない。
- ☞ 錢謙益が文字獄案に関わるのは、死後一世紀も経った乾隆帝（在位 1735—1796）のとき²。仇兆鰲が『杜詩詳註』を完成させた康熙52年の時点では、まだ不問。ゆえに仇兆鰲も錢謙益を多く引用していた。

4 翻刻本である芸生堂本

- ・ 芸生堂本と同じ系列の版本……大文堂『杜詩詳註』。³
- ・ 大文堂本でも「錢謙益」が削除されている。つまり乾隆34年以後の刻本。
- ・ 刷り具合から見て、芸生堂本は康熙52年本の翻刻本、大文堂本はその更なる後印本。復旦大学図書館の目録カードに、「大文堂本(903070-2)為“道光年”本」。

康熙32年 抄本

↓

康熙42年 初刻本

↓

康熙52年 補刻本 → 乾隆以後 翻刻本(芸生堂) → 道光以後 後印本(大文堂)

↓

康熙52年以後 後印本

- ☞ 芸生堂本と大文堂本は、康熙52年刻本のようなが、「錢謙益」が削除されており、康熙52年刻本を翻刻し、後刷りした版本。

² 錢謙益が禁書処分となる事情については、岡本さえ『清代禁書の研究』（東大出版会1996年）第3章「明清の文人」第3節「禁燬書の中心人物」（380頁）に詳しい。

³ 注1所掲拙論『『杜詩詳註』伝本研究——抄本・刻本・排印本』（3）康熙52年以後の後印本と翻刻本。を参照されたい。

5 削除の遺漏

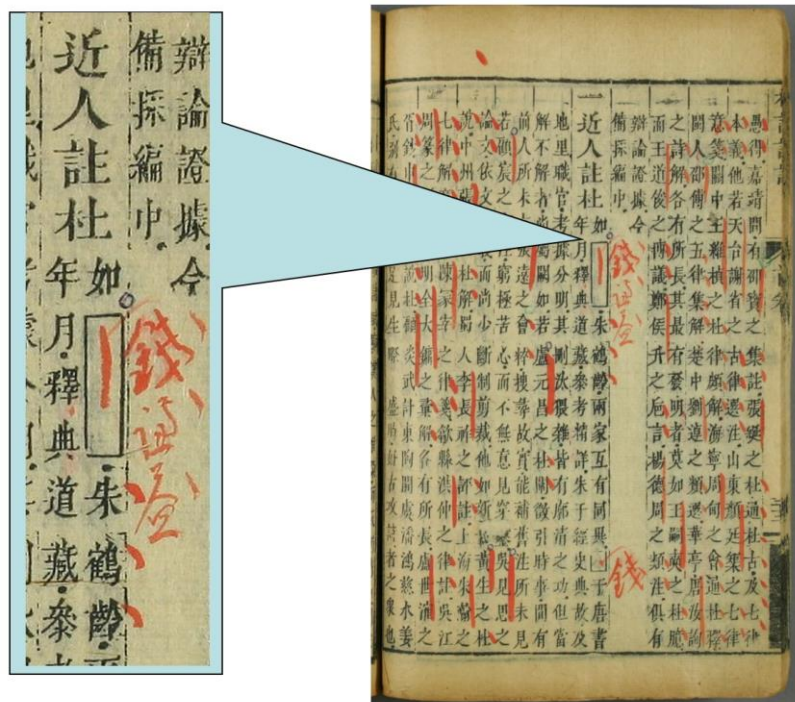


図1 早稲田大学蔵『杜詩詳註』大文堂本（土岐善磨旧蔵本）

- ・仔細に観察すると、「錢謙益」が削除されず、かなりの箇所が残ったままとされている。
- ・曹樹銘氏による先行研究あり。

《沈大成評点所据仇兆鳌〈杜詩詳注〉初刻足本跋及后跋》附考《本書内「錢箋」及「錢謙益曰」或留空白考》（《杜集叢校》中華書局香港分局，1978年）。

钱氏系狱获释以后，仍可自由著作，刻书传世。因此本人认为仇兆鳌氏此书于康熙三十二年（癸酉，一六九三）进呈时，自无回避「钱箋」、「钱谦益曰」因而留空之必要。本人以为仇氏此书，由进呈以至初刻，均无空白。惟这一部经沈大成评点的本子，虽系仇氏初刻足本，但并非初刻之初印本。而系乾隆三十四年（一七六九）诏燬钱氏著作以后的续印本。当时仇氏卒已多年，负责续印者，慑于诏燬钱氏著作之禁令，始加剷削。对于首卷最为严格，第一卷次之，而其他各卷遂或剷或存。考沈大成生于康熙三十九年庚辰（一七〇〇），卒于乾隆三十六年辛卯（一七七—）。所以这沈仇氏复印之时间，当在乾隆三十四年诏燬钱氏著作以后。（371页）

- ・「^あ或るものは^は剷られ或るものは存する」という状況は、次のとおり：

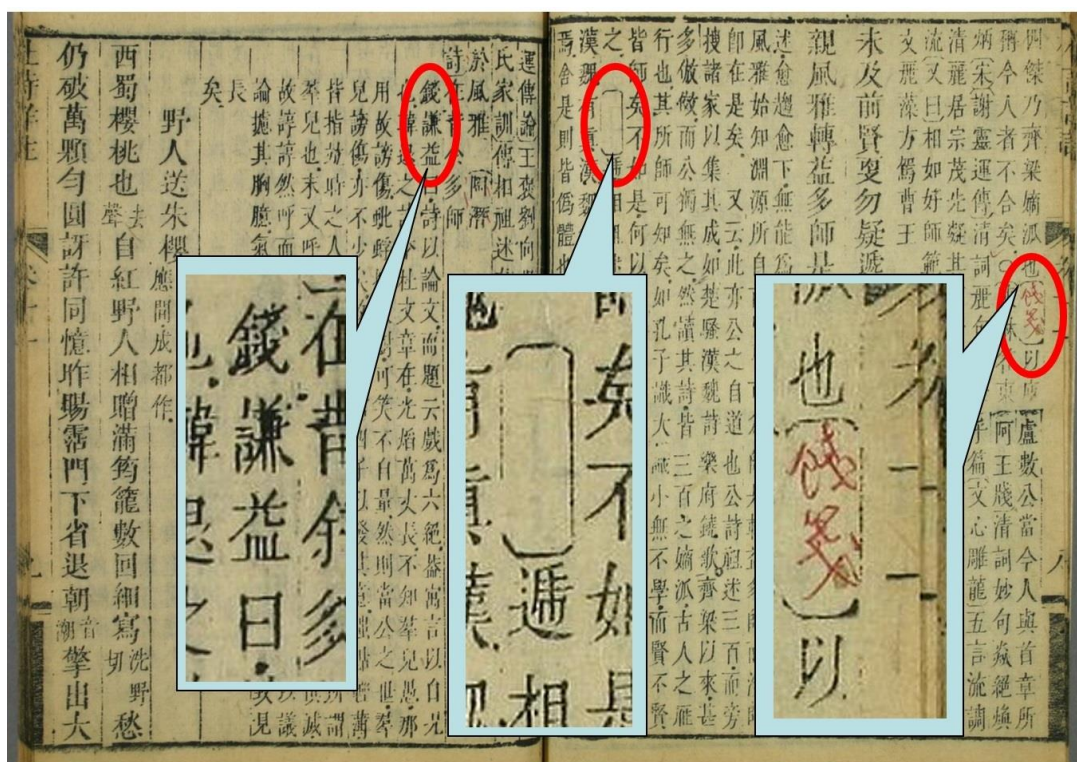


図2 早稲田大学蔵『杜詩詳註』大文堂本 巻11 8b-9a

・削除箇所について

曹樹銘氏の表記：「第十四及十五巻 「錢箋」空白者一処，不空白者十四処。所有「錢謙益曰」，全不空白」。(370頁)

☞問題点① どの作品に附された「錢謙益」なのか特定できない。ゆえに、どのような状況下で削除がされない傾向にあるのか、分析できない。

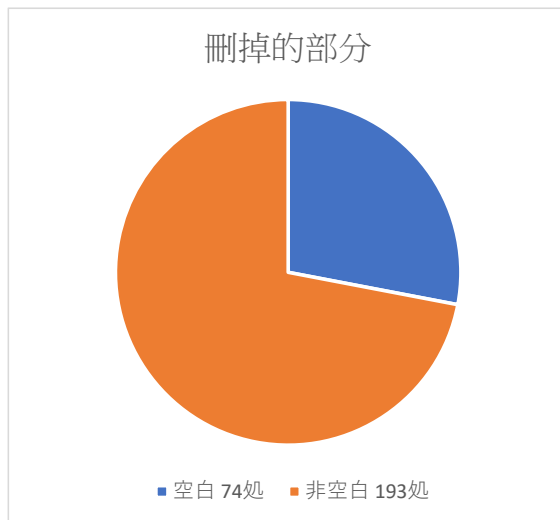
問題点② 何か所あるうちの「全不空白」なのか、明示されていない。

問題点③ 「秋興八首」について、「因此詩深受當時重視，故全留空白」。しかし巻3冒頭の「飲中八仙歌」や巻7冒頭の「三吏三別」は「錢箋」のまま。

・そこで再調査を行なった。詳細は(別表PDF「錢謙益が削除されている」)を参照されたい。いま結果を示すと以下のとおり。

錢謙益	全 267 箇所	
空白	74 箇所	28%
非空白	193 箇所	72%

☞7割も削除されないまま。



- 乾隆 34 年以後の版本（芸生堂本と大文堂本）は「錢謙益」を削除した箇所が一致。
 - ☞ 検閲を経た芸生堂本ならば政府のお墨付きを得たことになる。
 - ☞ 以降、『杜詩詳註』を刊行したい出版者は、このお墨付きを得た版本を元に刷りさえすれば、咎めを受けずに済むと考えたか。
- 『杜詩詳註』は全部で 25 巻。「詳」というその名のとおりに、詳細な文字情報で充ちた巨冊。
 - ☞ この中から「錢謙益」を探し出すのは、それほど容易ではない。出版者にとっても。検閲者にとっても。
 - ☞ チェックの精度を考えると、曹樹銘氏の指摘するとおりに、削除は「首巻が最も厳格で、巻 1 がこれに次ぐ」「秋興八首は愛読されて当時も重視されていたので、錢謙益の名が全て削除されている」というのは、確かに当たっている側面（全面ではない）もある。

6 錢謙益について

• 吉川幸次郎が認める学識

① 宋人の数種のうち、さいしょの注釈者である北宋の某氏、および南宋の趙次公は、まともな教養人であったと認められる。……十七世紀の明末清初、錢謙益の「杜工部集箋注」は、例外的に一流人による注釈である。……さきだつての宋代とあいならんで、もっとも多くの杜詩の注が出現したのは、清代である。錢謙益のはじめは助手であり、のちには師と不仲になって、みずからの注を公にした朱鶴齡、「讀杜心解」の著者浦起竜、「杜詩鏡銓」の著者楊倫、みな相当の学者であるけれども、必ずしも一流人ではない。仇兆鰲の「杜詩詳註」は、豪大さにおいて清朝の注の代表となろうが、すみずみまで良心をみなぎらせた著述ではない。文献の引用は往往にして杜撰であり、杜詩の本文を、しばしば恣意に改める。……とはいえ、精力を「經部」「史部」にそそいだ清朝の一流人の書にも、時に杜詩への言及がないではない。顧炎武の「日知録」、閻若璩の「潜丘劄記」のほか、段玉裁の「説文解字注」にも、それがあつたのを私は発見した。さすがに目を見はらせる説がおおむねであるが、それが偶然な言及なのを一そう残念がらせるだけである。

（吉川幸次郎『杜甫Ⅱ』「あとがき」筑摩書房 1972 年、266 頁）

② 先生のお宅におうかがいしたおり、先生に杜甫の全詩について注釈を加えてみたいということを申し上げたところ、先生は例のねめつけるようなかっこうをされ、「杜甫の注釈には、錢牧齋の学識と見識とを必要とする。それができるのは今のところ私以外にはない」とのおことばに、先生の注杜への御抱負と御自信に圧倒される思いで引き下がったことがあるが、先生は正しく杜甫に関する古今の第一人者であるといつても過言ではない。

（黒川洋一「杜甫と吉川先生と私」『吉川幸次郎全集』12 巻、月報、1968 年）

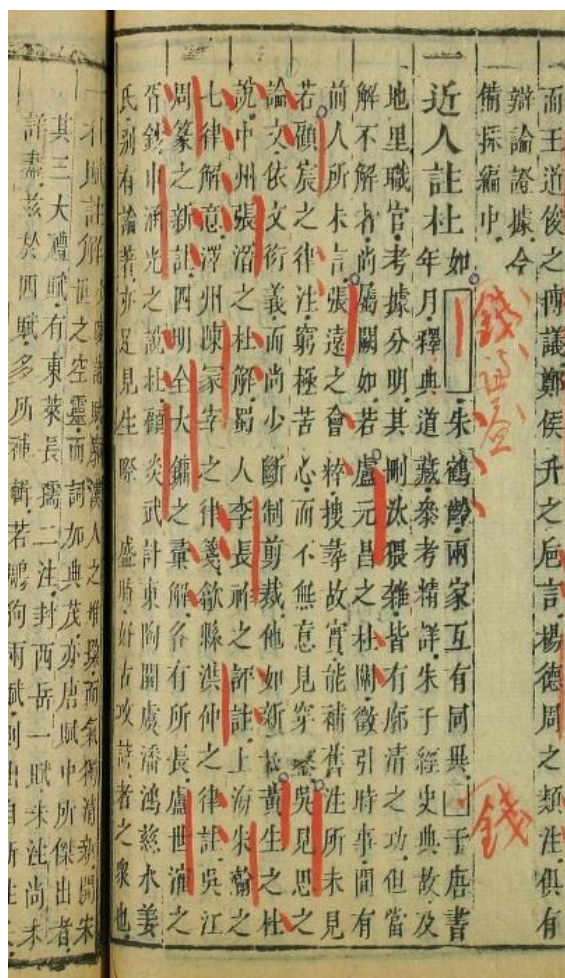
・仇兆鰲も錢謙益を参考にしていた。
『杜詩詳註』首卷「凡例」に、「近人註杜」という記載があり、その筆頭に錢謙益を挙げる。

・267箇所もの錢謙益の引用は、数量的には実はそれほど多くも無い。
参照：王嗣爽 1075 箇所／黃鶴 884 箇所／朱鶴齡 751 箇所／黃生 367 箇所⁴

・錢謙益の杜詩注釈について。
長谷部剛「杜詩箋注における錢謙益の著述態度—杜甫と錢謙益とを結ぶもの」(『中国詩文論叢』14集、中国詩文研究会 1995年)
赫潤華『「錢注杜詩」与詩史互証方法』(黄山書社 2000年／修訂版、中華書局 2020年)
孫微点校『錢注杜詩』(中国古典文学基本叢書、中華書局 2024年)

・「錢箋」であって「錢注」と言わない。
「王嗣爽曰」「朱注」
☞「鄭箋」に匹敵する存在だったか。

図3 早稲田大学藏『杜詩詳註』
大文堂本(土岐善磨旧藏本)



⁴ 王嗣爽は、仇兆鰲にとって、郷土鄞県(いまの寧波)の先輩であった。『杜詩詳註』「凡例」の「歴代註杜」において、「其の最も發明有る者は、王嗣爽『杜臆』に如くは莫し」と仇兆鰲は評している。仇兆鰲が王嗣爽の言説に多く従うのは、むろん『杜臆』自体が優れているという点が大きかったであろう。同時に、かれ王嗣爽が慕うべき郷土鄞県の先輩であったという点も、より仇兆鰲が信頼を寄せやすくなる要素として作用していたのではなからうか。この点については以下の拙論を参照されたい。『杜詩詳註』における「論世知人」——浙東鄞県という磁場(『松浦友久博士追悼記念中国文学論集』研文出版 2006年)。